

幼児の抽象図形の認識と発達

模様構成に見られる諸段階

中沢 和子

○高橋 照子

東洋英和女学院短期大学

城西幼稚園

I. 問題

集団保育では、積木、折紙、名札など抽象図形(立体の面を含む)とその名称を扱う場合が多いが、子どもが何を手がかりとし、どんな順序で抽象図形の認識を発達させてゆくかについてはあまり考慮されていない。しかし実際には、いろいろな形に対し子どもの扱い方はかなり違っているように見える。

例えば、四角い椅子を円形に並べて輪を作って坐ることは日常よく行われるが、この時教師やリーダー格の子どもが修正を加えなければ、四角い椅子の辺をつけて置いてしまう傾向が強く、たとえ輪のように坐っても、二、三脚がつ着いているのがみつうである。これに対してみかん・皿・牛乳ビンなど、丸いか、まるい部分が多いものは向隅をおいて円形に並べることができる。

このような事実から、筆者らは抽象図形の種類によって子どもの対応のしかたが違ふことを予想し、これをさらに詳しく知ることを目的として、次のような調査と観察を行った。

II 調査と観察

1. 対象: 東京城西幼稚園 29名、千葉県愛隣幼稚園 61名、長野県小諸幼稚園 50名、計 140名。(いずれも5才児。年長組10月~12月)

2. 材料: 日本色研色紙 黄・青・水色の三色を次の大きさの図形に裁断したもの。

円 直径 7^{cm} 5^{cm} 3^{cm}

正方形 一辺の長さ 7 5 3

直角二等辺三角形(直角をはさむ) 7 5 3

図形の種類と大きさについては、あらかじめ基礎調査を行って子どもが扱いやすいものを選び、色は予備調査によって男女児とも最も好む色を

用いた。これらの調査については、別に発表を準備している。

3. 方法: 城西幼では自由遊びの時間に、上記の材料を子ども達に示して自由に台紙に貼る遊びとして誘いかけた。他の二園では、一斉保育中に扱った。色・形の探摸、数、制作枚数などはいっさい子どもの自由にまかせた。

III. 結果

図形の扱い方は、子どもにより、図形によって明らかに相違が見られ、筆者らはこれを次のように分類した。

1. 具体物表現

(1) 図形を一つだけ貼り、直ちに、何かにみ立てて言語表現によつて具体物におきかえる。

円 ボール、お日さま等 7例、

正方形 ガレージ 1例、

三角形 やま 2例、

(2) 同じ図形を数個貼って、具体物におきかえる。これをさらに次の三段階に分けることができる。

i. 無意図的に貼つてのち、具体物におきかえる。

ii. 貼つてゆくうちに具体物のイメージが浮かび、そのイメージに合わせて貼り足してゆく。

iii. はじめから何を作るかをきめて貼つてゆく。

(3) 二種または三種の図形を組合せて具体物を表現する。(2)-iiiと同様にはじめから何を作るかをきまっている。

(4) 幾つかの具体物を考え、構図をもった絵として描画表現する。図形だけで表現できないときは図形を切り、または折って使い、クレヨンで線などを描き足す。

2. 模様表現

(1) 単一図形を扱うもの

- i. 大小の円をばらばらに貼り、模様として認めておきかえをしない ----- 2例
- ii. 正方形を辺を接して貼り、おきかえをしない ----- 2例

(2) 違う図形を組合わせるもの

円、正方形、三角形を組合わせて放散相模様の模様を構成し、おきかえをしない ---- 4例

IV. 考察

A. 取り扱い方に見られる傾向.

1. 抽象図形を子どもに与えたとき、最も初期段階としてみられる扱いは、凡そ一つの図形をはって具体物に見たてることである。この現象は、一人の子どもが何枚か続けて製作するときも最初に現れる。一枚目にこの段階を示し、次に紙を変えて組合せに進むもので、逆の例は見られなかった。

2. 次に同じ図形を多数使って、具体物におきかえる。貼ってゆくうちに具体物のイメージを思いつく段階があり、次にイメージを持って意図的に具体物を表現しようとする。

異なる図形を組合わせて使うことは、表現しようとする具体物のイメージに近づけようとして引き起されるものと考えられる。この年令の子どもに最も多くみられる段階である。

3. 次に、図形を使って構図を持つ描画を意図的に行う。絵としての構成が図形よりも優先し、図形に変形を加えたり、クレヨンで描き足しをする。これはおきかえ現象の最終段階とみられる。

4. 次に抽象図形を貼るとき具体物のイメージに束縛されず、図形としてのみ扱う段階が現われる。円をばらばらに貼る場合、描画を意図して製作する子どもとどちらが進んだ段階であるか断定することはむずかしいが、違う図形を組合せて規則性のある形を整えられる子どもは、基礎調査でも高い能力を示している。

このように具体物におきかえる現象を脱却したと認められるものを、筆者らは模様と呼ぶ。

一枚の台紙に模様を構成するときは、全く不規則に貼る時(円)と、中心から貼りはじめて同心円のように図形をおき、放散相模を作るものがある。明らかに後者が進んだ段階を示すと考えられる。

なお本調査では、何らかのパターンを作り、意図的に繰返して模様を構成する段階は全く見られなかった。

B. 図形別に見られる扱い方の傾向.

1. 円は初期段階の子どもに好まれる。また、一つ一つ分離して貼ることができる。円を接触させて連続して貼ると、輪を作る傾向が現われる。
2. これに対して正方形は、互いに辺をつけて貼るという著しい傾向を示す。
3. 三角形は角の一角で接触させることが多い。同じ大きさの直角等辺三角形を二つ合わせて正方形を作ると、正方形と同じ傾向を持つて次々と辺をつけてゆく現象をおこす。

V. 結論

1. 幼児が図形を扱うとき、段階的相違がはっきり現れる。
2. 初期段階では、抽象図形を与えてもおきかえによって具体的な形に引き戻されやすい。
3. 模様表現は、おきかえよりも抽象度が高い。
4. 抽象図形は、比較的単純なものとして、保育の中で安易に扱われやすいが、抽象力を養う立場から、十分な配慮をもって扱うことが必要である。
5. 保育の中で分離した形として扱うには円から始める方がよい。また、折り紙は具体物にたとえた作品として折り上げる以外に、図形の合成・分解の教材として作うことも考えられる。

附記. 作品はすべてスライドで示す。

分類をたてていそいそ